

中学部の実践

目次

実践例	1	「言葉・サイン・VOCAなどのコミュニケーションエイドを 活用してのコミュニケーションの指導について」・・・・・・・・	1
〃	2	「特定の場面で話すことが難しい生徒の代替手段を用いた コミュニケーション方法の獲得にて」・・・・・・・・	3
〃	3	「他者の働き掛けを受け入れ、肯定的に関わることを目指した指導について」・・・	5
〃	4	「タブレット端末を活用したコミュニケーション ～『朝の会 健康観察』を通して～」・・・・・・・・	7
〃	5	「自分の姿や行動を客観的に振り返る ～タブレット端末を活用して～」・・・・・・・・	9
〃	6	「コミュニケーション機会としてのタブレット端末の活用」・・・・・・・・	11
〃	7	「タブレット端末を活用した数量の理解」～「フラッシュ型教材」を通して・・・	13
〃	8	「手先を使った作業ができるだけ長時間できるようにするための 取り組みについて」・・・・・・・・	15
〃	9	「相手にしっかり伝わるように話すための支援について」・・・・・・・・	17

実践例 1 「言葉・サイン・VOCA を活用してのコミュニケーションの指導について」

1 実態把握

- ・両下肢に麻痺があり手指の動きもぎこちない。発音も不明瞭である。
- ・コミュニケーションに意欲的である。状況の理解や周囲への関心も高いので発音さえ明瞭であれば円滑にコミュニケーションを楽しむことができる生徒である。
- ・「あ・か・く・た・(つ)・な・は・ま・ん・が・ぐ・だ・ば・ぶ・ぱ・ぷ」を発音できる。それ以外は、ほぼ「ん」になる。
- ・日常多い発語 「あんぱん=饅頭」「ン〜ンドウダン=オレンジジュース」
「んま〜ん=うま〜い」「かん〜んかん=帰りの会」等

2 自立活動の目標と指導内容・指導場面・指導方法

指導目標 身近な教師や友達に対して適切に意思表示を行い簡単な応対ができる。		
指導内容	指導場面	指導方法
・自分に起きた出来事や考えを言葉で表現する。	教育活動全体 生活単元学習	・濁音&拗音付き五十音表を活用しての言葉による意思の伝達
・困ったときやわからないときの対処法を知る。	教育活動全体 作業学習	・サインによる意思の伝達
・発音練習	国語・数学	・教師と一緒に発音練習
・代替手段の獲得	朝・帰りの会	・VOCAの活用

3 具体的な指導実践

- (1) 五十音表を活用しての言葉による意思の伝達
 - ・濁音&拗音付き五十音表が印刷された硬質下敷きを生徒の机の上に常に挟み、活用。
 - ・担当教師は紙の五十音表を常に携行。
- (2) サインによる意思の伝達
 - ・トイレ ・指で数やクラスを表して
- (3) VOCA の活用（発音の不明瞭さを補うために）
 - ・朝と帰りの会の司会

4 成果と課題

○成果

- 五十音表を活用した言葉による意思の伝達は VOCA と違い録音されたメッセージだけではなく本人のその時々のおもいを聞き取ることができる。本生徒は伝えたいおもいのたくさんある生徒なので、いろいろなことを発信してくる。こちらが聞き取れないときは生徒自ら表を指し意思の疎通を図ることができた。

校外学習やスキー教室等普段と違う場面では

生徒の話す内容も普段とは違うので、こちらでも聞き取りにくいことが多くなる。しかし、そのような時も携行している紙の五十音表でスムーズにコミュニケーションすることができた。スクールバス内にもこの表を置いたことにより本生徒の発音に慣れていない教師も簡単なコミュニケーションをすることができた。

- 両下肢に麻痺があり移動にも時間がかかるが、サインによる意思の伝達を行ったことで排泄の失敗は数えるほどしかなかった。

- VOCA を使って司会をすることで「健康観察〇〇さんお願いします。」や「～を始めます。礼」「～を終わります。礼」のメッセージに友達が素早く反応してくれるので本人はとても喜び意欲的に VOCA を使用することができた。



写真1



○課題

- 五十音表を活用しての言葉による意思の伝達には「時間がかかる。」「文字を読めない友達には伝わらない」という課題がある。
- サインに関してはトイレや数字以外でも、簡単で伝わりやすいサインを獲得していけばコミュニケーションの幅がより広がるので今後も増やしていきたい。
- 現在使用している VOCA の録音秒数は4秒間である。したがって4秒間の中での有効な活用の仕方を練っていく必要がある。今後は「健康観察係」として友達の呼名に活用するのが有効ではないかと考えている。

コミュニケーションにとっても意欲的な生徒なので、今後もいろいろなツールも活用しながら「思いが伝わる楽しさ」を一緒に分かち合っていきたい。

実践例2 「特定の場面で話すことが難しい生徒の代替手段を用いた コミュニケーション方法の獲得について」

1 実態把握

- ・集団学習の場で不安を感じやすく、人前で自分の考えを発表することが特に苦手な生徒である。
- ・家庭では安心して大きな声で話すことができるが、学校等家庭以外では自由に話すことが難しい。また、初めての場や見通しが持てない場面においても不安そうな表情を見せている。
- ・元来、人前で大きな声を出して話すことが苦手な生徒であったが、中学部に入学し環境が変わったことを機に、人前で声をだすことがほとんどなくなった。話さなければいけないという不安感から、特定の人以外とのコミュニケーションを避けようとする様子も見られる。
- ・発声を促されることは、対象生徒の心理的な不安感を増大させ、他の問題行動となって表れることもあった。普段のコミュニケーションでは、実物を提示したり、身振り手振り等のジェスチャーで伝えたり、黒板や紙に文字を書いて伝えたりしている。

2 自立活動の目標と指導内容・指導場面・指導方法

指導目標 自分の伝えたいことを様々な方法で表現する。		
指導内容	指導場面	指導方法
<ul style="list-style-type: none"> ・自己表現 ～ らくがきコーナー ・代替手段の獲得 ～ ホワイトボードの活用 	<ul style="list-style-type: none"> ・休憩時間 ・学校生活全般 	<ul style="list-style-type: none"> ・一緒に「らくがき」することを通して、クラスの友達との自然な関わりを促す。 ・描かれた内容を基に会話を楽しむ。自己表現することの楽しさを味わうことができるようにする。 ・日常会話や発表場面、おつかい等で、代替手段の活用機会を設定する。 ・学習の中でのホワイトボードを活用した発表の仕方を練習する。

3 具体的な指導実践

○具体的な指導実践① ～「らくがきコーナー」の設置～

学級の壁面に「らくがきコーナー」を設け、休み時間に描きたいものを自由に描くことができるようにした。友達が楽しそうに描いている様子を見て、対象生徒も自ら自分の気持ちを絵や言葉で表現するようになってきた。描いた内容に応じて、周囲から様々な反応があるため、楽しみながら描いていた。

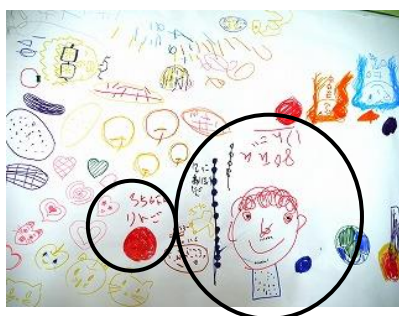


写真1

「らくがき」で描く内容は①→④のように変化した。

- ①なぐり書き
- ②果物などを表した簡単な絵
- ③保護者や担任などの顔の絵
- ④「〇〇に行きたい」などの簡単な要求、昨日の出来事など
(写真1)

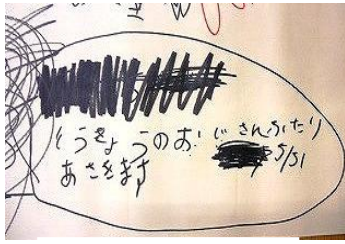


写真2

④の時期から、教室にあるプリントや画用紙に昨日の出来事や自分のやりたいことを書いて、担任に伝えるようになった。対象生徒専用のホワイトボード（写真2）を用意し、自由に伝えたいことを書くことができるようにした。

○具体的な指導実践② ～ホワイトボードの携帯（写真3）～

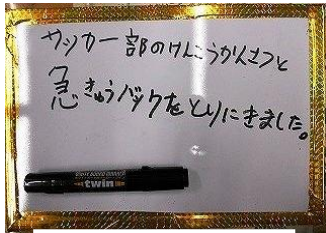


写真3

事務室や保健室などへの簡単なお遣いを対象生徒に依頼するようにした。ホワイトボード携帯前はなかなか用件が伝わらないため、一人で行くことを嫌がっていたが、ホワイトボードを持ってからは自信をもって一人で行くことができるようになった。

学級では、ホワイトボードに昨日の出来事などを記入し、自分から担任や友達に教えてくれるようになり、積極的に他者に関わろうとする様子が見られるようになった。また、教師の質問に対して「はい」「いいえ」だけでなく、知っている単語などを用いて詳しく自分の考えを伝えられるようになってきた。

○具体的な指導実践③ ～その他に配慮したこと～

- ・安心して活動できるよう、「話さなければならない」というプレッシャーは必要以上に与えないようにした。また、見通しをもって活動に取り組めるよう事前の告知を丁寧に行った。
- ・教師からの質問は生徒自身が答えられる内容のものを選ぶ。答えられずに終わるといった負の経験はなるべく少なくなるようにした。

4 成果と課題

○成果

- ・らくがきコーナーを掲示したり、ホワイトボードを携帯したりしたことで、自分の考えを以前よりも楽に他者に伝えられるようになった。また、自分から積極的に他者に関わろうとすることが増えた。
- ・コミュニケーション面での不安が軽減され、自分の意思を表出するための手段を獲得しつつあることから、心理的に安定してきている。対象生徒が不安定になったときによく見られた物を隠す、壊す、友達とトラブルを起こすといった問題行動が以前よりも減った。

○課題

- ・現段階では、限定された場面でのホワイトボードの活用であるため、様々な場面で活用できるようにしていきたい。
- ・リラックスした場面では、自分から気持ちや考えを伝える機会が増えたものの、授業場面等、緊張感のある場面ではなかなか自分から考えを伝えることができない。発表方法も教師に頼っていることが多いため、自分で自信をもって発表できる方法を検討していきたい。

実践例3 「他者の働き掛けを受け入れ、肯定的に関わることを目指した指導について」

1 実態把握

- ・両下肢に障害があり、可動式の装具を使用している。歩行や階段の昇降は可能であるが段差の大きい場所等ではバランスを崩しやすい。
- ・教師と一対一で学習することが多かったためか、ごく親しい人以外との関わりに大きな抵抗感を示し、友達とのコミュニケーションは少ない。また本人が原因でトラブルになったときでも素直に謝ることが難しい。
- ・身近な大人には自分からよく話し掛け、冗談を言ったりスキンシップをとろうとしたりする。
- ・集団生活でのルールや約束を理解してはいるものの、ふざけることも多く、自分の思い通りにならないとイライラして人を押したり、物を投げたり等の乱暴な言動をとることがある。
- ・人前での発表等は緊張のため、声が小さく発音も不明瞭で、確認するように教師の顔を見ながら話す。
- ・教師の支援を受ける機会の多い友達に対しては、自分からお世話をしたり活動に誘ったりする。

2 自立活動の目標と指導内容・指導場面・指導方法

指導目標 安定した気持ちで集団に参加し、集団の一員であるという意識を高める。		
指導内容	指導場面	指導方法
<ul style="list-style-type: none"> ・役割の設定 ・集団の中での関わりづくり 	<ul style="list-style-type: none"> ・日常生活の指導（給食準備） ・生活単元学習 ・作業学習 	<ul style="list-style-type: none"> ・必然性があり負担感の少ない役割を設定する。 ・単元を通して毎時間同じ流れで学習を進め、見通しがもちやすく参加しやすい活動を設定する。 ・責任感を感じられるように、一つの工程を担当し、作った道具を友達に手渡しする場面を設定する。

3 具体的な指導実践

(1) 役割の設定～日常生活の指導



教師や友達が給食準備をしても一人で座っていたり、自分の分だけを準備したりしていた。こぼす、割れるなどの負担感の少ない牛乳パックやストローなどの配布の役割を任せた。教師が持ってきた物を個別のお盆に配布することから始め、徐々に教師の言葉掛けが無くても自分で気付いて取り組めるようになってきた。気分左右される面はあるが、自分の任された仕事だけでなく、友達と協力して準備に取り組む姿が見られるようになった。

(2) 集団の中での関わりづくり～生活単元学習

生活単元学習では外国や日本について学び、そのまとめとしてカード作りを行った。集団作りの一環として学習のまとめで簡単なカードゲームを取り入れた。失敗したくない思いや、



自分の思い通りにならない友達との関わりにおいて、当初は消極的であった。自分の作ったカードやお気に入りのカードを取りたいという気持ちが出てくると少しずつゲームに参加するようになり、カードを取れるようにもなった。カードをとれたという喜びを味わうとともに、友達や教師の賞賛が本人の自信や集団の中でも安心感につながったと考える。現在は仲のよい友達に誘われて二人でゲームをする姿が見られるようになった。

(3) その他 教育活動全般を通して



作業日誌（出来高表）を通して作業学習の様子を学級でも評価した。褒められたことで自信がつき、自分から「今日は〇個できました」、「〇〇頑張った」と積極的に発言するようになった。また給食の完食、はみがき等の本人が頑張ったと実感していることを連絡帳で伝えたり、家庭での頑張りの記入があったときは教師間だけでなく、学級でも話題にしたりした。関わる人が本人のがんばりを共有することがさらなる意欲につながった。

4 成果と課題

○成果

- ・自分のよい所を認めてくれたという体験を繰り返し、信頼感がうまれたことで、意固地になって反抗する回数が減ったことにつながり、相手の話を素直に聞いて行動できることが増えてきた。イライラしたり、自分の思い通りにならなかったりしたときでも、すぐに気持ちを切り替えられるようになってきた。
- ・自分から関われる人や機会が増え、落ち着いた環境に身を置けることで、各学習でやるべき課題に取り組める時間が増えた。
- ・教師の促しが必要なきときはあるものの「ごめんなさい」と謝ることができるようになってきた。

○課題

- ・ふざけることで相手の出方を見たり、八つ当たり、いやがらせをしたりして周りに理解してもらうのではなく、新しい環境に少しでも早く慣れるための支援を確立する。
- ・集団生活でのストレスを減らし、より主体的な姿を引き出すために、様々な集団での学習を経験し、自分の気持ちや要求を伝えられる相手を増やしていきたい。
- ・注意や指示に対する耐性を高める。
- ・有効な手立ての検証に関わりのある職員間で共有し、指導方法の般化へとつなげていきたい。

実践例4 「タブレット端末を活用したコミュニケーション」 ～「朝の会 健康観察」を通して～

1 実態把握

- ・発語はなく、指差しや目線などで要求を伝える。トイレの際も、指でWCサインを出し、意思を伝える。
- ・友達のことを意識はしているが、自分から関わる姿は見られない。「～さんとタッチ」など教師が働き掛けると、友達と関わるができる。
- ・にぎやかな場所を苦手とし、一人で自分のペースで活動することを好む。

2 自立活動の目標と指導内容・指導場面・指導方法

指導目標 ・クラスメートの名前を覚え、タブレット端末を用いて友達と関わる。 【3人間関係の形成(1)】【6コミュニケーション(1)】
指導内容 ・友達と関わり合う場の保障 ・毎朝の繰り返し活動
指導方法 ・代替手段の活用 ・写真や音声の活用

3 具体的な指導実践

個別の課題への取り組み

(1) ドロップトークの操作に慣れる

- ・アプリケーション「ドロップトーク」にクラスメートの写真と音声（担任の声）を入力した。（写真1参照）
- ・最初は教師と一緒に友達の所に移動し、写真と本人とを照らし合わせてから、ボタンにタッチするようにした。
- ・ミスタッチすることも多かったため、段ボールで枠を作り、画面上に貼りつけた。（図1参照）



写真1
ドロップトークの画面

【評価】

- ・友達のところに自分で考え、移動できるようになった。
- ・端末の操作に慣れた。

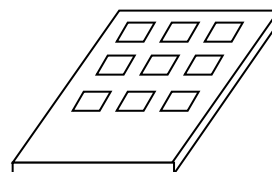
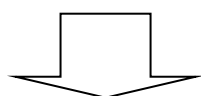


図1
段ボール枠のイメージ

(2) 自分の判断で友達に聞く

- ・教師が「次の人は？」と質問をし、それをヒントに自分から友達の方へ向かえるようにした。
- ・友達の方へ自分の判断で向かった時に称賛し、自信につながるようにした。
- ・端末の操作に慣れてきたことを受け、段ボールの枠を外した。



【評価】

- ・生徒自身が判断し、友達のところまで移動して、健康チェックができた。
- ・端末を一人で操作することができた。

4 成果と課題

○成果

- ・ドロップトークの写真と友達とのマッチングが確実にになった。自分の役割という面もあるが、友達への関心が高まり、迷わず移動する姿も見られるようになった。
- ・教師が手を添えなくても、自分から端末を操作し、友達とやり取りができるようになった。タブレット端末をコミュニケーションの代替手段として活用できた。

○課題

- ・今回は、学校生活の中の健康観察に特化し、学習を重ねてきた。しかし、国語における語彙の獲得と表出や、作業学習における報告の場面など、本生徒にとってたくさん活用できる場があったと考える。活用の機会を広げることが必要である。
- ・端末の利用は社会に出てこそ活用すべきと考える。家庭生活、実習先など、本生徒がどの場においても活用できるよう、環境を整える必要がある。

実践例5 「自分の姿や行動を客観的に振り返る ～タブレット端末を活用して～」

1 実態把握

中学部〇年〇組は、男子〇名、女子〇名、計6名である。コミュニケーション能力については、言葉の明瞭さや語彙に個人差はあるが、5名が言葉によるコミュニケーションが可能である。1名は発語がないが、表情や視線、動作で気持ちを表現することができる。友達同士の関わりについては、友達を意識し、自分から友達にあいさつをしたり、遊びに誘いかけたりする様子が見られるようになってきた。一方的な関わり方も見られ、教師の仲立ちを必要とする場面も多くあるが、少しずつ友達同士の関わりが増えてきている。自分の行動について周囲から指摘されることを苦手とする生徒もいるが、教師や友達からの意見を受け入れられるようになってきている。

2 自立活動の目標と指導内容・指導場面・指導方法

指導目標		
<ul style="list-style-type: none"> 中学生らしい適切な生活習慣（あいさつ、返事、整理整頓など）を身に付ける。 【健康の保持】 <ul style="list-style-type: none"> 自分のできていること、できていないことを知り、苦手なことにも挑戦しようとする気持ちを育む。【人間関係の形成】 		
指導内容	指導場面	指導方法
「中〇マナー講座」 <ul style="list-style-type: none"> あいさつや返事の仕方 座っているときの姿勢など 整理整頓 	<ul style="list-style-type: none"> 学級活動 日常生活の指導 	<ul style="list-style-type: none"> 教師や友達があいさつや返事、机の運び方などを実演する。その様子をタブレット端末で撮影する。 映像を見ながらうまくできている部分、できていない部分について意見を話し合う。 今後どのようにしていけば良いか考えさせたり、アドバイスをしたりする。

3 具体的な指導実践

(1) マナー講座 「自分の姿はどんな風に見える？」

学級活動の時間に「中〇マナー講座」として、あいさつや返事をする時の声の大きさ、手の上げ方、椅子の座り方、机の運び方などをタブレット端末で撮影し、撮影したのを見ながら、自分の様子について他の人がどう感じるかについて意見を交わした。



教師の見本を見る。
姿勢、手の上げ方返事の仕方など



生徒が実演している様子を、タブレット端末で写真や動画で撮影する。



項目	10点	9点	8点	7点	6点	合計
あいさつ	3	0	4	8	15	15
返事	8	10	7	10	35	35
姿勢	8	8	7	10	32	32
手上げ	100	0	100	40	22	22
椅子	7	0	6	4	17	17
机	10	0	10	9	19	19
その他	0	0	9	7	16	16
合計						100

動画を見て気付いたことを発表しあい、最後に10点満点で評価する。

生徒の変容

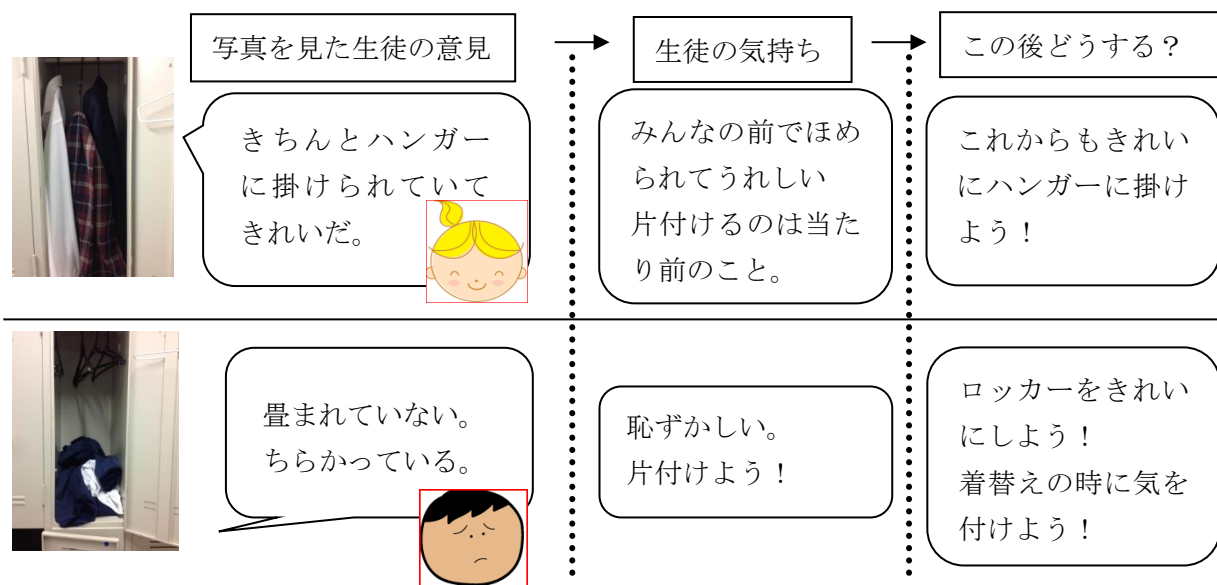
撮影されていることの特別感が意欲を高め、どの生徒も積極的に活動に参加することができた。あいさつや返事の仕方、座り方などに判断基準を設けて採点していき、どの程度できているかを点数化して伝えたことも意欲の高まりにつながった。

映像で確認することで、自分はどのように見えているのか知ることができた。また、今後どのように変えていけばよいか客観的に考えることができた。

マナー講座で助言されたことを、普段の生活に生かすことができた生徒もいた。

(2) マナー講座 「整理整頓はできている?~更衣室、ロッカー、机の中」

更衣室や教室のロッカーの中、教室の机など、生徒が管理している場所を写真で撮影し、ロッカー等の整理整頓の状況を見て、それぞれがどのように感じるか話し合った。



生徒の変容

片付けをあまり丁寧にしたがらない生徒も、友達からの率直な意見を聞くことで、これからは「きれいに片付けよう」と、自分の行動を変えていこうとする気持ちを育むことができた。また、きちんとできていた生徒についても、改めて認められる場ができたことで、これからも継続していこうとする気持ちをもつことができた。

4 成果と課題

○成果

- ・タブレット端末自体に興味のある生徒が多く、授業に活用することで意欲の高まりが見られた。
- ・タブレット端末を用いたことで、すぐに自分の様子を振り返ることができ、即時評価につながった。また、タブレット端末の一時停止や拡大などの機能は、「○○をもう少し頑張った方がよい」と教師が注目させたい部分を提示するのに効果的だった。
- ・授業場面以外にも、友達同士でタブレット端末を使ってお互いの様子をチェックし合う様子が見られるようになった。

○課題

- ・マナー講座の中では、適切な行動や姿を意識し、正そうとする姿が見られたものの、他の場面で意識して行動できる生徒は少なかった。他の場面への般化を目指し、指導を継続していきたい。

実践例6 「コミュニケーション機会としてのタブレット端末の活用」

1 実態把握

- ・女子1名、男子2名である。
- ・それぞれで話し言葉はあるが、声が低かったり不明瞭であったりして、生徒同士でのやりとりは難しい。

2 自立活動の目標と指導内容・指導場面・指導方法

指導目標 ・「伝える、伝わる」経験を繰り返し、人と関わる喜びを感じる。(コミュニケーション)		
指導内容	指導場面	指導方法
意思表示の共有化	国語・数学	・ビンゴゲーム形式とし、「話す」、「聞く」、「考える」活動を繰り返す。 ・iPad を活用し、自他の活動結果を確認しながら進める。

3 具体的な指導実践

(1) 個別の課題への取組

個々のニーズから、絵カード（正しく名前を発声）、平仮名、片仮名（2～3択で正しい文字を選ぶ）について、個別で学習する。(写真1) 九つの絵カードや正しい文字をそれぞれで選び黒板の枠へはる。(写真2)



写真1

段階的にステップアップを図る。

S1：絵カードの名前を覚えて話す。→動詞を加えて話す。

S2：絵カードと平仮名を合わせた選択肢及び掲示

→覚えたものは平仮名のみの掲示へ

S3：片仮名の選択肢及び掲示（清音）

→片仮名の選択肢及び掲示（長音や促音を含む）

→漢字を交えた選択肢及び掲示

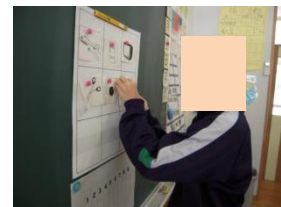


写真2

(2) 全体での場の共有

それぞれで黒板に張り付けた文字カードを教師が声に出して読み、全体の前で正誤確認してから、ビンゴゲーム形式で展開する。

S1：ボックスに入っている絵カードを引き、物の名前を読み上げる。(写真3)

S2、S3：読み上げた声が聞き取れたか意思表示をする。(写真4)

読み上げられた物の名前が自分の選んだ中にあるか、それぞれで確認、共有。(写真5～8)

※アプリケーション「ドロップトーク」を活用。

「生徒名」「ある」「ない」「やったー」「ざんねん」「○」「×」「聞こえる」「聞こえない」

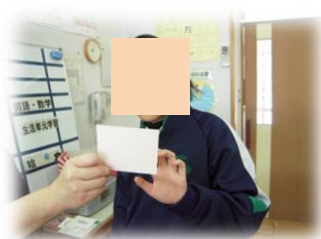


写真3



写真4



写真5

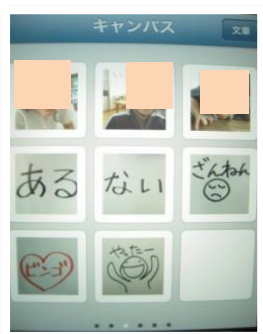


写真6



写真7



写真8

(3) 他者への関心

ゲーム形式にすることで、勝敗を意識した活動が展開され、1回ごとに自分の選択したカードを見て一喜一憂する姿が見られた。同時に友達の話や動きに注目するなど、他者への関心が高まり、関わりも増えた。

4 成果と課題

○成果

- ・場を共有することで、自らの課題に留まらず友達の問題にも着目するようになり、仮名文字への興味関心が高まった。また、話してみよう、書いて伝えてみようとする姿が、学校だけではなく家庭においても見られるようになった。
- ・不明瞭な意思伝達場面においてタブレット端末を活用したことで、自他の意思が明確に伝わるようになり、意欲的に活動する姿を導くことが出来た。また、表情豊かに表現するようになった。

○課題

- ・円滑なコミュニケーションを図るためにタブレット端末の活用は有効であったが、さらに関わりを深めたり、思いを伝えたりできるように基本的な仮名文字の理解・定着が不可欠である。(正確な入力等)

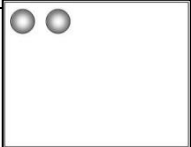
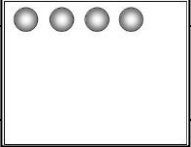
実践例7 「タブレット端末を活用した数量の理解

～「フラッシュ型教材」を通して～

1 実態把握

- ・ 中学部男子3名。
- ・ 数を数える時、具体物を一つずつ数える。一桁動詞の加法をする時には○をプリントに書き、その合計を数える方法で行う。
- ・ 数え間違いがあったり、時間がかかったりする。

2 自立活動の目標と指導内容・指導場面・指導方法

指導目標	
指導内容	
指導方法	

指導目標

- ・ 右図のようなカードに表示される○（ドット）を直観的に数える。
- ・ 2枚のカードの○の合計を直観的に数える。

【4環境の把握－（2）感覚や認知の特性への対応に関すること】

指導内容

- ・ 数学の時間の導入でウォーミングアップとして毎時行う。

指導方法

- ・ iPadのプレゼンテーションアプリ「KeyNote」でフラッシュ教材を作成する。
- ・ 次々表示されるカードにある○の個数を瞬時に答える学習を重ねる。
- ・ 第2段階として2枚のカードの○の数を合計し、瞬時に答える学習へ移行する。
- ・ 数が小さく計算が簡単なものから、カードの使用をやめ、暗算へ移行する。

3 具体的な指導実践

（1）1枚のカードの○の数を直観的に数える

- ・ アプリ「KeyNote」に1ページごとにカードが切り替わるプレゼンテーションを作成した。
- ・ 生徒が端末を操作（画面をタップ）し、表示された○の数を瞬時に数える学習を進めた。
- ・ 一人一台ずつ端末を操作する、友達の前で発表する、モニタに接続し一斉に答えるなど、バリエーションを変え、楽しみながら数を数えられるように展開した。

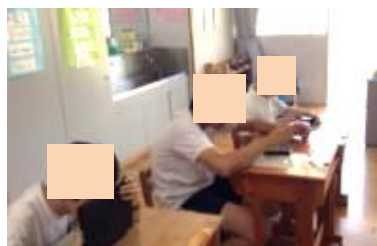
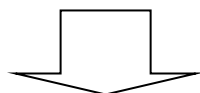


写真1

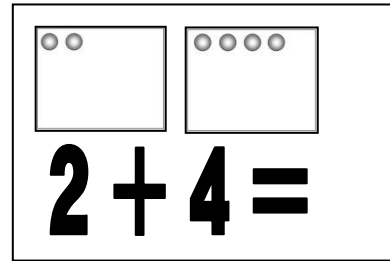
【評価】

- ・ 10までの数を直観的に素早く数えられた。
- ・ 間違えた友達に教える場面が見られ、生徒同士が関わり合いながら学習を進めることができた。



(2) 2枚のカードの合計を数える

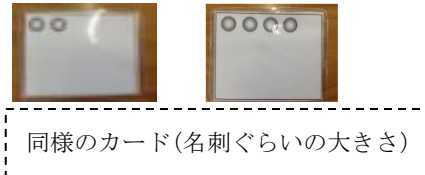
- ・プレゼンテーションの画像を右図のようにし、同様に素早く答える学習を進めた。
- ・手元に同様のカードを置き、直観的に答えることが難しい生徒は実際に指差しながら数えるようにした。



プレゼンテーションの画面

【評価】

- ・同様のカードを使用して指差し数えながら合計を数えていた生徒が、答えが4程度の数までは直観的に答えを出すことができた。
- ・1名の生徒は、答えが10前後の和は、直観的に答えられるようになった。

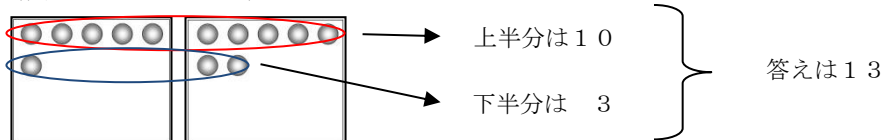


同様のカード(名刺ぐらいの大きさ)

(3) 繰り上がりの加法への発展 (10前後の和が答えられるようになった生徒1名が対象)

- ・タブレット端末の使用から、カードの使用に切り替えた。
- ・答えが10以上の数になる場合、カードの置き方と見方で、すぐに答えが求められることを生徒と確かめながら進めた。(下図参照)

〈例 6 + 7 = ? 〉



【評価】

- ・直観的に合計が10となる形に気づき、一つずつ〇を数えなくても答えを求めることができた。

4 成果と課題

○成果

- ・数を数える時、一つずつ数えるのではなく、10までの数の合成を行い、数を感覚的に捉えることができた。
- ・数え間違いが減り、加法への発展もできた。

○課題と今後の展開

- ・今回は、タブレット端末を活用することで、生徒の意欲を引き出す意味では有効であったが、ドットカードを使った学習では暗算にまで発展できなかった。10以下の数の合成分解を具体物を操作しながら学び、暗算に結び付ける過程が必要であった。
- ・カードやタブレット端末がなくても、頭の中でイメージできるようにし、日常生活に生かせるよう発展していく必要がある。

実践例 8 「手先を使った作業ができるだけ長時間できるようにするための 取り組みについて」

1 実態

○特徴的な行動の様子

- ・ハイガード歩行から手を下ろした歩行に変化してきているが、ちょっとした段差や床のコードの配線等に足を取られて転倒しやすい。
- ・長距離の移動時には車椅子を使用している。自操可能であり、腕の力が強いのでブレーキがかかっても前に進む。
- ・両手の指先を使い、衣服のファスナーを開けたり、両面テープのはくり紙をはいだりすることができる。
- ・大人との一対一の関わりを好むが、友達への関心も高まってきており、呼び掛けに応えたり遊びに誘ったりする場面が増えている。
- ・「食べたい、欲しい→あごをたたく」、「ほめて、おしまい→手をたたく」「トイレに行きたい→下腹部をたたく」等を簡単な身振りで伝えたり、挨拶や人を呼びたい場面で「あ」と声を出して伝えたりする。
- ・日常生活動作に関わることは簡素な言葉による指示理解ができる。

2 自立活動の目標と指導内容・指導場面・指導方法

<p>指導目標</p> <p>手先を使った作業にできるだけ長時間取り組めるようにする</p> <p>【5身体の動き（1）（2）（5）】</p>
<p>指導内容</p> <ul style="list-style-type: none"> ・物をつまんで、ひっぱる作業 ・握った物を紙や台に押しついたり、別の場所へ移動したりする作業
<p>指導方法</p> <ul style="list-style-type: none"> ・作業学習の時間に、段ボールはがし、メッセージカード作りなどに取り組み、段ボール紙をつまんで引っ張る、ペットボトルにトイレットペーパーを入れ、再生紙を作るなどの活動に取り組み、根気強く作業に取り組むことができるようにする。 ・生活単元学習の製作の時間に、シールを貼ることで色を付けたり、製品に付けるメッセージカードを製作したりする中で、手を使う活動に慣れるようにする。

3 作業学習、生活単元学習、日常生活の指導の取り組み

<10月5日 PT 支援日>

◎那波 PT から(今回観察されたこと)(紙の工房 作業学習)

- ・段ボールはがし
- 左手指または両手指で可。右手を補助手として使用も可能だが、持続が難しい。途中で飽きてしまったり、興奮をしたりするので、やり方がなかなか定着しない。
- ※転倒により左手首を骨折し、治癒したとのこと。左手も積極的に使おうとする。



- ・手を使う際、片手から両手を使い出すと、興奮状態になりやすい。

→片手を固定したり休ませることによって、集中力が少しUPするよう工夫が必要。

(例：机にミトンを置き、中には本人の好きな感触の素材を入れる)

手指からの感覚刺激を抑制する。

- ・目と手の協応の時間が長くなって、集中力がUPすれば、認知面の発達が期待できる。

☆作業学習や生活単元学習の際、ミトンに左手を入れて、テーブルに固定した状態での作業を試みる。

↓
ミトンの中に本人の好きな感触の素材を入れることができず、テーブルに固定されることを嫌がったため、ミトンとテーブルを留めているマジックテープをはがす。

<11月28日 PT支援日>

◎PTから(今回観察されたこと)(紙の工房 作業学習)

- ・水で濡らした段ボールをめくる作業

主に右手でめくり、そのめくったものを箱に入れることも可

- ・両親指第1関節伸展位。屈曲は可能。ピンチ力は弱い、ゆっくり可。

↓
・左手を上から少し押さえておくと、右手の集中力が↑

- ・両手指を屈曲させて握る。つまむなどの操作の練習 **要**。手掌面から感覚入力を促すとよい。
- ・タオルや(音の出る)ボールを握る。

☆生活単元学習のスタンプを使ったカード作り。

はじめは、スタンプにインクを付ける、カードにスタンプを押す、ステンシルで着色する、といった複雑な作業を手を添えて行っていた。目と手の協応が行われないことがあり、作業意欲が落ちていた。

↓ 助言により

作業の方法を簡素化し、適度に休憩を入れることで、作業意欲を持続するようにした。

☆生活単元学習(貼り絵を使った幟作り)の時間に、紙をスプリング式のはさみを使って、紙を切ってみる。

☆衣服の着脱や鞆の開け閉めを自分の手で行う機会を増やす。(「つまむ」操作の練習)

☆休み時間や朝の活動の時間などを使って、光るボール、音の鳴るボールで遊ぶ。(「握る」「投げる」「とる」の練習)

4 今後の取り組みに向けて

○今後も「目と手の協応」を意識した活動を行い、日常的に「握る」、「つまむ」ことによりいっそう慣れることができる機会を増やす。

○作業に進んで取り組める補助具を工夫する。

○作業への動機付けや意欲を持続するための支援を今後も試行する。

実践例9 「相手にしっかりと伝わるように話すための支援について」

1 実態

- ・滑舌が悪い。
- ・困難な課題にぶつかったときや、人前や慣れない環境で激しく緊張してしまうことがある。
- ・プレッシャーに弱い。

2 外部専門家から観察された事項や評価 【6月19日（水）1回目のST支援日より】

- ・マ行、ナ行が不明瞭。
- ・発声時、頭や肩が一緒に動いてしまう。

3 課題

(1) ねらい

- ・より相手にしっかりと伝わるように話す。【5 身体の動き（1）】

(2) 指導内容

- ・体と口の分離（下顎を使って発声できるようになる。）

(3) 指導方法

- ・壁発声（あー）10秒発声×5回 顎を引いて肩、腰がそらないようにかかとをつけて行う。

4 指導の経過【2回目（9月9日）、3回目（12月11日）について】

(1) ねらい

- ・行事（学園祭、高齢者福祉施設との交流）に向けてより相手にしっかりと伝わるように話す。

(2) 指導内容（※クラスメート全員で取り組むこととした）

- ・発声練習（大きく長い発声、短い発声、長い発声と短い発声）
- ・手遊びリズム練習
- ・呼吸練習
- ・空気椅子（体幹を鍛える→声量の安定と姿勢の矯正）

(3) 外部専門家の所見

- ・発声練習では発声持続の伸びがみられ、安定した声量での話が増えてきた。
- ・手遊びリズム歌では遅い、速い、普通リズムに合うようになってきている。
- ・空気椅子では筋耐久性向上がみられ（意欲アップに伴って）声量拡大あり。
- ・体幹が安定してきたことで、顎を上げないで発声できるようになってきた。

(4) 今後の取り組みに向けて

- ・教えていただいた指導を引き続き行う。
- ・空気椅子の他に壁たてなども行うとよいとアドバイスをいただいた。

○クラス全員で行うメリット

- ・行事などわかりやすい目標に向けて取り組めた。
- ・リラックスした雰囲気の中、ゲームのようにできる。
- ・個別に抜き出して行うよりは、時間が取りやすい。
- ・大きな声を出すことに前向きになった生徒もいた。